

中学校武道領域における正座に関する一考察

—正座の学習経験の有無に着目して—

上田 佑衣 (大阪教育大学)

1. 研究動機及び目的

「正座」は日本的な座法の一つとして、武道、茶道、冠婚葬祭時等で行われている。正座は、『広辞苑』によると「姿勢正しくすわること」である。また、小笠原流礼法では、正しい姿勢とは周りから見て美しく、全身に余分な力を入れていない状態であり、美しい座法・所作の一つである。中教申で我が国の伝統と文化により一層触れるよう示され、中学校で武道必修化となった。

そこで、本研究では生活習慣や教育カリキュラムの違いに着目し、正座の座り方、また、武道授業の経験による正座の座り方を調査し、中学校武道領域において「伝統的な行動・考え方」としての正座や礼法・所作の指導方法の検討をする基礎資料を得ることを目的とする。

2. 研究方法

伊藤(2016)を参考に独自作成した質問紙と正座評価指標を用いて二つの実態調査を行った。

I) 各種属性の正座の実態調査

各種属性の違いによる正座の座り方を調査した。

対象：0 大学剣道部 51 名、0 大学外国人留学生 9 名、T 高校生 74 名、0 大学附属 I 中学生 144 名
調査日時：2019 年 6 月 23 日～11 月 17 日

II) 武道授業と正座についての調査

武道授業前後の正座の座り方を調査した。

対象：0 大学附属 I 中学生 144 名

調査日時：前 2019 年 10 月 20 日、11 月 17 日

後 2019 年 11 月 13 日、12 月 15 日

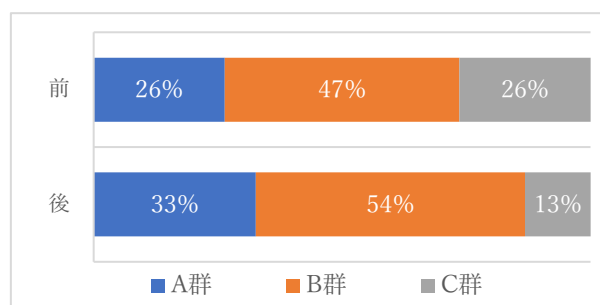
《分析方法》結果を Excel に入力し、IBM SPSS Statistics にて統計処理をした。自由記述は、計量テキスト分析フリーソフト KH coder (樋口) で分析した。なお正座評価得点から、高得点者を「正しくできる (A 群)」中得点者を「できる (B 群)」低得点者を「できない (C 群)」として処理した。

3. 結果と考察

I) 大学生剣道部員は正座が A 群 45%、B 群 47%

と評価が高く、9 割の者が正座はできているが、半数にあたる B 群はより正しく行う必要もある。正座の座り方は高校生、中学生、留学生の順だった。正座評価得点と生活習慣・授業経験などで比較したところ、「昼の間の有無」「食事のスタイル」「冠婚葬祭の経験」などに差はなかったが、「授業武道授業経験の有無」において有意差がみられた。

II) 正座評価得点の分布は、授業前は正座が A 群 26%、B 群 47% という結果であり、授業後は A 群 33%、B 群 54% という結果である。正座評価が C 群であった者が B 群に評価が上がり、B 群であった者は更に A 群に評価が上がった。授業で正座の仕方を学ぶことにより身に付いたと考えられる。



(図1) 授業前と後での正座評価の比較

また、自由記述を整理すると、「正座は日本の伝統文化であり、背筋が伸びてきれいな座り方である」とまとめることができる。一方、「足が痛い、痺れる」というイメージも持っていた。

4. まとめ

本研究から、武道授業を経験することで正しい正座が身に付くことが明らかとなった。正座を身体運動、身体操作の一つとして考えた時、保健体育科武道領域の中で正しい動作として学ぶことは意味あることであり、その上で「伝統的な行動・考え方」としての内面を大切に正座や礼法・所作を指導することが求められる。身体操作を獲得するには時間と経験による慣れが必要であり、継続した学びも大切である。これらのことが学校教育に武道が取り込まれている意味の一つであると思う。